

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2007年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			観光学 研究科	観光学 専攻
指導教員	所属・職名		氏 名		
	観光学部教授		安島 博幸 印		
自然・人文の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/>		個人・共同の別	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 <input type="checkbox"/> 共同 名	
研究課題名	マスメディアに見る観光地のイメージの変遷とその要因の考察				
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏 名		
	観光学研究科観光学専攻博士課程後期課程1年		蔡珠姫 印		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏 名		
研究期間	2007年度				
研究経費	200 千円				

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は観光学の観光地開発の分野において、観光地を開発し、持続的に発展させるために必要な要素を明らかにすることへの寄与を目的に展開された。

93年以降スキー人口の急激な減少に伴い、日本におけるスキーリゾートが衰退し続けてきた要因として、既存研究で言及されてきた経済的・時間的制約に対し、スキーおよびスキーリゾートのイメージの変化という新しい視点からその要因を考察する。

これまで映画をテキストとして行ったスキーのイメージの分析に加え、新聞に掲載されてきたスキー関連記事を分析し、スキーおよびスキーリゾートのイメージの変遷をみる。また、日本におけるスキーリゾートの盛衰とスキーおよびスキーリゾートのイメージとの関わりを明らかにし、さらに、日本におけるスキーおよびスキーリゾートのイメージ変遷の背景と要因を明らかにすることを目的とする。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[マスメディア] [スキーリゾート] [イメージ]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は映画と新聞の 2 つのマスメディアをテキストとして分析を行った。

まず、日本に封切られたスキーを題材とする映画 178 本の分析結果である。

- ① 日本で封切られた映画の中で、スキー関連映画の比率は時間の流れに連れ、徐々に減少しました。映画は時代を先取りし、スキーが最も輝いた時代に数多く撮影されたと考えられる。
- ② 登場人物を年代別に見ると、60 年代までは「お金持ち」や「花形の職業」の人たちが多く登場したが、その後は特別な人ではない一般の人の割合が増えていった。その反面、外国の場合は学生や会社員などの比率が日本と比べて非常に少ないし、お金持ちや専門職に就いている人の比率が全年代を通じて高く、また、スキー選手が日本より倍の高い比率を占めている。これらは、外国では経済的制約が大きくスキー及びスノーボードが日本より一般に普及していないし、スポーツとしての性格が日本より強いことを示唆している。
- ③ 日本映画にみられるスキーは、初めは外国から導入された軍事技術として紹介された(戦前)。50 年代頃を中心に憧れの新スポーツとして注目を浴び始め、60 年代はお金もちのレジャーとして最も輝いた時代であった。70 年代以降もスキー活動は活発に行われ、80 年代から急速に大衆化された。90 年代スキーとスノーボードの世代交代がみられる中、再びスポーツ性が強くなるが、すでにスキーは「憧れ」のレジャーといった高かった位置づけは映画の中ではすでに失われていたことが明らかになった。

朝日新聞のスキー関連新聞記事を分析した結果は、以下の通りである。

スキー関連新聞記事はスキーの普及とともに時間の流れに連れ、徐々に増加した。記事の内容もスキー大会の増加、スキー用具の多様化、スキー場の開発や環境問題など、多様化して来た。

1) スキー導入期(～1945)：天皇家のレジャーと軍人の戦技としてのスキー

「株父宮殿下、五色へ 高松宮殿下も御一緒に(29)」、「伊皇太子殿下美技/スキー(37)」、「将兵のスキー練習(41)」、「戦技スキー訓練開く(44)」

戦前の特徴はスキーに出掛けた皇太子殿下とその家族の様子が多く載っていることである(18 記事)。これらの「スキーをする皇太子」ということが、スキーが「憧れの高級レジャー活動」としてのイメージを形成するに大きい影響を与えたと考えられる。そして、40 年代に入ると軍事訓練の戦技スキーに関する記事が大部分を占めている。

2) スキー流行期(1946～1970)：おしゃれな流行レジャーとしてのスキー

「スキー場は大にぎわい(51)」、「ヨーロッパのスキー場を見る(56)」、「[虚栄心]=21 スキーの“旅情”完全にお嬢さん気分(61)」、「スキー場はケガ人ブーム(62)」、「雪は少なくて人間ばかり(64)」、「苗場スキー場へ 皇太子ご夫妻 皇太子ご一家(67)」

先進国のヨーロッパのスキー場が一般に紹介されるなど、スキーは憧れの冬の高級レジャーとして流行が加速化した。スキーに出掛ける自体が人に差をつけることになり、若い女性たちが虚栄心で金持ちのお嬢さん振りをしていたことも分かる。また、スキーに関しての知識もないままスキーに乗ったりし、マナーの問題や負傷や事故も多くみられる。スキーは富裕の象徴として消費されていた。

3) スキー定着期(1971～1980)：多様化するスキー場

「四季通じ楽しめる 赤城国際スキー場(71)」、「スキー場も値上げラッシュ(74)」、「家族向きのスキー場(75)」、「初めて“夜間飛行” 宮の森スキー場(77)」

人口雪、人工スキー場など技術の革新で四季に楽しめるレジャーになっていく。一味違うスキー場を求め、スキー場を選ぶ都会のスキーヤーの増加のため、スキー場は値上げをしてでも施設に投資を行う。もはやスキーに出掛けることだけでは人に差をつけることが出来なくなったため、どれほどおしゃれなスキー場にいけないかが差をつける基準になったと考えられる。

4) スキーブーム期(1981～1992)

研究成果の概要 つづき**①大ブームのスキー**

「欧州の珍しいスキー場 コースにしひがし(82)」、「雪さっぱり商魂上滑り 各地でスキー場開き(82)」、「スキーだけは古い[夜はパーティー]と新商法(88)」

人に差をつける競争はスキーウェアとアフタースキーにまで拡大していく。「スキー板 9 万円前後、靴 7-8 万円と輸入物の高級品に人気集中」。また、「注文制の高級スキーウェアまで登場し、予約が約 1000 件(例年の三割増)」という内容もある。そして、「当時年間パーティー用服装代は 5 万円以上が 30%、20 万円以上出費する学生も 7%もいる」と、アフタースキーのための高級パーティー服も市場に顔を出した。

②スキー場のマイナスイメージの浮上

「高地スキー場[待った] 八ヶ岳開発に自然保護団体が反対(83)」、「スキー場開発の後遺症 風(84)」、「自然破壊憂える市民ら 六甲山開発事業(89)」「豪華なスキー場に映る日本の自画像(91)」

華麗な表舞台の裏ではスキー場開発 VS 自然保護といった対立関係が浮かび上がった。他方、若者の節度のない消費行動とマナーの欠如に対する憂慮の声が多く出てくるのがこの時期である。また、全国各地から浮かび始まった山開発の副作用で、スキー場開発に対する自然保護団体と地域住民の反発が強くなった。

5) スキー離れ期(1993~)**①安・近・短主流のスキーと格好いいスノーボード**

「スキー場、いま[安・近・安]」が主流 ゲレンデも不況“寒波”(93)、「韓国スキーツアー人気 費用も時間も北海道の半分【西部】(93)」、「スノーボードが人気急上昇(94)」、「一味違うボーダーファッション(95)」

スキーウェアのリサイクルス広告記事が増えた。高い国内スキー場より韓国の「安い海外スキー」が人気を集めた。スノーボードの人気上昇が注目を浴びる年もあったが、長く続かなかった。

②スキー離れとスキー場経営の危機

「スキー用品不況(96)」、「三セク、3割が赤字 債務超過は 8 法人/岐阜(02)」、「寂しすぎるスキー場 過去の幻想捨て、再考の時/秋田(07)」、「韓国人スキー客に期待国内客減少で誘致合戦/新潟(07)」

スキー人口の急激な減少でスキー用品およびスキー場、第 3 セクタなどスキー関連事業の不況が目立つ。90 年代「日本から韓国へのスキー」が、国内スキー人口の減少と韓国のスキー人口増加の影響で、2000 年代に入ると「韓国から日本へのスキー」に情勢が一変する。

映画と新聞の分析結果をまとめてみると、日本におけるスキーおよびスキーリゾートのイメージが、高級から一般的なレジャーに変化したことが明らかになった。それに対して、ヨーロッパやアメリカを中心とした外国におけるスキーおよびスキーリゾートのイメージは現在でも高級のイメージを持つ「憧れ」の対象である。

そして、スキー人口の減少がスキーリゾートの経営に深刻な影響を与えていることは、日本で人々のスキーリゾートに訪れる主な目的が単にスキーをすることに止まっていることを反映していると推察できる。これは日本とヨーロッパのスキーリゾートでの滞在生活で見られる最も大きい差である。

日本におけるスキーおよびスキーリゾートのイメージが、高級レジャーから一般レジャーに変化した背景には、流行やブームに伴った急速な大衆化があり、急速な大衆化によるイメージの変化は「差異化」という人間の心理的な働きに影響を与えられられる。

また、多様化した余暇生活のなかで、スキーは、健康、自然、交流といった多様な記号を持たず、一般的に「富の象徴」としてしか消費できなかったため、差異化以外の欲求を満足させることができなかつたことがスキー人口減少の大きい原因であると推察される。

※ この(様式 2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

学会発表 & 雑誌論文

① 2007年12月

「新聞にみるスキーのイメージの変遷」、第22回 日本観光研究学会 全国大会
学術論文集、pp.13-16.

② 2008年3月

「マスメディアにみるスキーのイメージの変遷」、日本スキー学会 第18回大会、
pp.20-21.